The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『マハーマーヤー・タントラ』における念誦について
――ラトナーカラシャーンティの理解を中心に――

大　観　慈　聖

1．序論　インド後期仏教密教の理論と実践に唯識思想がどのように統合されていったかを考察することは極めて興味深く，かつ重要である．周知のように，唯識と密教について論じた研究は多数存在する．しかしながら，これらは唯識と密教に関する複数の文献を比較検討した間接的な関係性の論証に止まったものがほとんどであり，ひとりの論師によるひとつの著作を具体的に取り上げて直接的にそのテキストの中に展開される唯識と密教の両者の結びつきを考察した研究は少ない．「波羅蜜の理趣」と「真言の理趣」の双方に精通したインド学僧ラトナーカラシャーンティ（＝R）は，『マハーマーヤー・タントラ』（＝MMT）に対する註釈，『有功徳』（＝Gu）を著している．唯識思想を奉じかつ密教にも精通した碩学Rの著作である密教文献Guは，「唯識と密教の統合」というこの重要で複雑なトピックを扱う場合，梵文原典が顕在するということもあり，この問題の解明に資する恰好の第一次資料のひとつである．そこで，本稿では『秘密集会タントラ』（＝GST：Skt.ed.［Matsunaga］/D：No.442–443/P：No.81/大正：No.885）の体系を前提とするMMTにおける念誦（jāpa；bzlas pa）[1] の解釈に唯識思想を巧みに導入したMMT第2章第3偈d句の「**存在と非存在を欠いた〔状態で〕**」(**bhāvābhāvavivarjitam**)という語に対するGuの註釈箇所（［MMT&Gu］p. 26, pp. 126–127）[2] を紹介し，Rにおける唯識と密教の両体系の統合化の現象について考察しよう．

2．「オーン字」（＝呼気）[3] と「フーン字」（＝吸気）[4]　先ず，Rは「オーン字」と「フーン字」をそれぞれ「知を心髄とするもの」，「身語心〔そのもの〕であり破壊できない三金剛をもたらすもの」と定義するGST第11章第2偈[5] を引用して，両文字の意味をそれぞれ「ただ知のみということ」，「無顕現であるという点で，身語心と等しいということ」と解釈する[6]．すなわち，

> 「どのように「呼気」と「吸気」をなす〔べきである〕のか，というならば，〔本文に〕**存在と非存在を欠いた〔状態で〕**と答える．〔「呼気」と「吸気」を〕順次に〔なす〕と言外に仄めかされている．実に，ただ知のみということが聖音オーンの意味である．「知

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を心髄とするオーン字を」と，吉祥なる『秘密集会〔タントラ〕』〔第11章第2偈a句〕に説かれているから．無顕現であるという点で，身語心と等しいということがフーン字の意味である．「身語心〔そのもの〕であり破壊できない三金剛をもたらすフーン字を」と，まさにそこ〔すなわち，GST第11章第2偈ef句〕に説かれているから．」[7]

と説く．

3．「唯心性」と「平等性に入ること」　次に，Rはオーン字〔を唱えること〕（＝呼気）によって顕示される「一切はただ心のみであるということ（唯心性）」をMMTに説く「**存在を欠いた〔状態〕**」(**bhāvavarjitam**) と解釈し，無顕現な状態となること，〔すなわち〕フーン字〔を唱えること〕（＝吸気）によって顕示される「平等性に入ること」をMMTに説く「**非存在を欠いた〔状態〕**」(**abhāvavarjitam**) と解釈する．すなわち，

「この故に，オーン字〔を唱えること〕（＝呼気）によって顕示される「一切はただ心のみであるということ（唯心性）」の観察によって，〔男性ヨーガ行者は〕**存在を欠いた〔状態となる〕**．まさにその「一切はただ心のみである」〔と〕は非存在のこと，〔すなわち〕心以外の諸の存在物は存在しないということである〔から〕，この「一切はただ心のみである」に関してもまた，「平等性に入ること」は無顕現な状態となることであり，フーン字〔を唱えること〕（＝吸気）によって顕示される．その〔「平等性に入ること」の〕観察によって，〔男性ヨーガ行者は〕**非存在を欠いた〔状態となる〕**．以上が，**存在と非存在を欠いた〔状態で〕**〔という語の説明〕である．」[8]

と説く．

4．「唯心性」と「平等性に入ること」の観察　最後に，MMTにおける念誦について，Rは唯識思想に基づく解釈を展開する．すなわち，

「それでは，「唯心性」と「平等性に入ること」の観察〔と〕はどのようなものであるのか？これについて，〔次のような〕教誨が〔ある〕．〔すなわち〕まさに聖音オーンを唱えながら，勇者から呼気と一緒に知恵の光線が上昇しているのを見なさい．そ〔の知恵の光線〕によって一切の仏のなせるものを拡散し（広観），種子としての音節を唱えながら，自身の尊格の形象としてその一切を観想することが「唯心性」の観察である．次に，フーン字の吸気とともに一切を勇者に収斂させること（斂観）が「平等性に入ること」の観察である．この〔「唯心性」と「平等性に入ること」の観察の〕両者を徐々に再三再四疲れが生じない限り行いなさい，というこのことがこのタントラ（＝MMT）における念誦である．」[9]

と説く．このように，Rは「唯心性」(cittamātratā) と「平等性に入ること」(samatāpatti) の観察についての教誨（upadeśa）を紹介して，MMT所説の念誦法の説明としている．ここで当該念誦における諸概念の対応関係を時系列に基づいて以下に整理

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

してみよう．

①オーン字を唱えること（＝呼気）→勇者から一切を広観[10]（＝「唯心性」の観察）→存在を欠いた状態

②フーン字を唱えること（＝吸気）→一切を勇者に斂観[11]（＝「平等性に入ること」の観察）→非存在を欠いた状態

上記①と②の両過程を順次徐々に再三再四疲れが生じない限り行うことが，Guにおいて R が解説する「MMT における念誦」である[12]．

5．結論　以上，MMT の念誦に関する R の解釈は，男性ヨーガ行者が**存在と非存在を欠いた状態**となるために，念誦法における調息，すなわちオーン字（＝呼気）とフーン字（＝吸気）[13]の呼吸法を用いた「生成のプロセス」（生起次第）に対応する広観と「完成のプロセス」（究竟次第）に対応する斂観の両観想法と，唯識思想における「唯心性」と「平等性に入ること」という両境地とをそれぞれパラレルに解釈するという仕方で統合したものと結論付けることができる．このような解釈はドゥルジャヤチャンドラ註『有幻』(D:No.1622/P:No.2494)，クリシュナ〔サマヤ〕ヴァジュラ註『憶念』(D:No.1624/P:No.2496)，アランカーラシュリー註『大幻と名づける難語釈』(D:No.1625/P:No.2497)[14]といった MMT に対する他の三註釈には存在しないという点で Gu に特徴的である[15]．なお，R は MMT 第 1 章第 27 偈 a 句の「**思念されるや否や**」(**cintitamātreṇa**) という語を「念誦されるや否や」(japtamātreṇa) と解釈している（[MMT&Gu] p. 22, p. 118）．このように R にとって念誦することは思念することに他ならず，本稿の考察により，MMT において男性ヨーガ行者が思念する対象は「唯心性」と「平等性に入ること」であると理解できる．

1）MMT と GST の関係については，[大観 2009c] を参照．MMT の念誦法は第 2 章第 1 節～第 3 偈に説かれている（当該テキストと邦訳は [大観 (1)] pp. 142–141 (pp. 33–34) を参照）．この MMT 所説の念誦法は秘密集会聖者流，特に『五次第』の体系と共通している（[大観 (1)] pp. 120–119 (pp. 55–56) 註 47 と [大観 2009c] p. 473 (p. 88) 註 4 参照）．MMT の体系では念誦は極めて重要な要素であり，MMT 第 1 章第 33 偈においてマハーマーヤーは「唱えて成就する女性」(*paṭhitasiddhā) と定義され（[MMT&Gu] p. 23, p. 122），MMT 第 2 章第 4 偈では念誦以外の諸修法の実行を排除することが規定されている（[MMT&Gu] p. 27, p. 127）．このことは MMT 第 1 章第 21 偈に対する註釈箇所おいて R が MMT を「現観を著しく略説したもの」（[MMT&Gu] p. 19, pp. 111–112）とする解釈とも無関係ではない．念誦は現観，すなわち成就法の直後に実践されることが多いからである．なお，R 作『マハーマーヤー成就法』とその後半部の抜粋である『マハーマーヤーと名づける陀羅尼』には，具体的な尊格の真

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

言も説かれるなど，より詳しい念誦法の記述が存在する（[大観 2011] pp. 146–145 (pp. 71–72) の記述【MMNDh:2】～記述【MMNDh:4】を参照）．

2）本稿における MMT と Gu のテキスト上の位置は便宜上既刊の校訂本［MMT&Gu］に準拠する．ただし，筆者が本稿において提示した Gu の解釈については，筆者が適宜再校訂した Skt. と Tib. のテキストによる．なお，MMT 本文の言葉は太字で指示する．

3）Gu の Skt. の解釈によれば，オーン字を唱えることは「吸気」(ucchvāsa) を意味し（注 9 参照），R はこの語を「生命気である風を上昇させること」と解釈している（[MMT&Gu] p. 25, p. 125）．ヴァジュラパーニ作『ラグタントラ・ティーカー』も「オーン字〔を唱えること〕によって吸気を〔男性ヨーガ行者はなすべし〕」(oṃkāreṇa ucchvāsam ([Cicuzza]:śvāsaṃ)) という Gu の Skt. と同様の解釈を示し（[Cicuzza] p. 137），オーン字〔を唱えること〕を「吸気」(ucchvāsa;dbugs ni rṅub pa) とする『五次第』の説と一致する（注 1 参照）．しかしながら，本稿では文脈上 MMT と Gu の Tib. の読みに従い（[MMT&Gu] pp. 125–127），「吸気」(ucchvāsa) を「呼気」(dbugs gtoṅ ba = *niḥśvāsa / *niśvāsa) と解釈する．因みに，アランカーラシュリーはオーン字を「教えを本質とするもの」，「変化身を自性とするもの」，「身体の文字」，「報身を本質とするもの」と解釈している（[大観 (1)] p. 131 (p. 44)）．なお，アヌパマラクシタ作『六支ヨーガ』に対するラヴィシュリージュニャーナの註釈『グナバラニー』によれば（[Sferra] p. 123），「**吸気**〔と〕は〔息が内に〕入ることを特徴とするもの」(**ucchvāsaṃ** praveśalakṣaṇam) である．

4）Gu の Skt. の解釈によれば，フーン字を唱えることは「呼気」(niḥśvāsa) を意味する（注 9 参照）．これはフーン字〔を唱えること〕を「呼気」(niśvāsa;dbugs gtoṅ) とする『五次第』の説と一致する（注 1 参照）．しかしながら，本稿では文脈上 MMT と Gu の Tib. の読みに従い（[MMT&Gu] pp. 125–127），「呼気」(niḥśvāsa) を「吸気」(dbugs rṅub (or 'jug) pa = *ucchvāsa) と解釈する．因みに，アランカーラシュリーはフーン字を「法身に似ているもの」，「心を金剛とするもの（心金剛）を本質とするもの」と解釈し（[大観 (1)] p. 131 (p. 44)），ヴァジュラパーニ作『ラグタントラ・ティーカー』には「フーン字〔を唱えること〕によって〔息の〕消滅を〔男性ヨーガ行者はなすべし〕」(hūṃkāreṇa nirodham) という記述がある（[Cicuzza] p. 137）．なお，アヌパマラクシタ作『六支ヨーガ』に対するラヴィシュリージュニャーナの註釈『グナバラニー』によれば（[Sferra] p. 123），「〔**息の**〕**消滅**〔と〕は〔呼吸の〕停止状態」(**nirodhaṃ** sthirībhāvam)，「**呼気**〔と〕は〔息が外に〕出ることを本質とするもの」(**niḥśvāsaṃ** nirgamarūpam) である．

5）Skt.:OṂkāraṃ jñānahṛdayaṃ kāyavajrasamāvaham / ĀḤkāraṃ bodhinairātmyaṃ vākyavajrasamāvaham / HŪṂkāraṃ kāyavākcittaṃ trivajrābhedya-m-āvaham ([Matsunaga]: trivajrābhedyam āvaham) / (critically edited by the present author, cf. [Matsunaga] p. 32); Tib.:*oṃ* yig ye śes sñiṅ po ste // rdo rje sku ni 'thob byed pa'o // *āḥ* yig byaṅ chub sprul pa'i bdag // rdo rje gsuṅ ni 'thob (P:thob) byed pa'o // *hūṃ* yig sku gsuṅ thugs yin te // rdo rje gsum ni mi phyed 'thob // (D:106a5/P:113a3–4);漢訳:所謂唵字為智本．即身金剛平等．阿字法無我．即語金剛平等．吽字不可壊．即心金剛平等．如是三金剛平等堅固而住．（大正:

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

No.885, 479 頁上段 18–20 行目）．当該偈はサンスクリットとして難解であり，対応するチベット語訳と漢訳も充分な解釈を示しているとは言い難い．松長有慶氏は当該偈を「オーン字を観想すれば，知恵を心髄とする身金剛を得ることになろう．アーハ字を観想すれば，菩提の無我である語金剛を得ることになろう．フーン字を観想すれば，身語心の三金剛の不壊を得ることになろう．」と邦訳し（松長有慶著『秘密集会タントラ和訳』（法蔵館，2000 年）p. 60），サンスクリットの構文を完全に無視した理解を示す．これに対して筆者は当該偈をサンスクリットとして不完全な文と理解し，原語の対格の機能を維持させるために「男性ヨーガ行者は観想せよ」（*bhāvayed yogī）の語を補って「知を心髄とし身金剛をもたらすオーン字を，菩提の無我であり語金剛をもたらすアーハ字を，身語心〔そのもの〕であり破壊できない三金剛をもたらすフーン字を〔男性ヨーガ行者は観想せよ〕」と邦訳（＝解釈）する．本稿の考察はこの拙訳の理解に基づいている（注 7 及び当該拙訳を参照）．なお，当該偈の ef 句は『ヘーヴァジュラ・タントラ』に対する R の註釈『真珠鬘』にも引用されている（[HVT&MĀ] p. 30）．ただし，Gu と『真珠鬘』に引用される当該偈の f 句の読みは dya と mā の間に sa が介在することにより GST 本文と一致せず（[Matsunaga] p. 32 の脚注 12 によれば 3 写本（何れも東大写本，筆者の調査によれば京大写本）が sa を挿入），シュローカとして 1 シラブルの超過を生じている（本注と注 7 の下線部を参照）．

6）GST に対する R の註釈『クスマーンジャリ』（D:No.1851/P:No.2714）にも同様の解釈が確認される（D:219b1–6/P:340a3–340b2）．

7）kīdṛṣam ucchvāsaniḥśvāsaṃ kuruta ity āha:**bhāvābhāvavivarjitam** iti. yathākramam iti śeṣaḥ. jñānamātratā hi praṇavārthaḥ, “OṂkāraṃJñānahṛdayam” [GST:11.2.a.] iti śrī*Guhyasamāje* vacanāt ([MMT&Gu]:śrī*Guhyasamāja*vacanāt). nirābhāsatvena kāyavākcittasamatā HŪṂkārārthaḥ, “HŪṂkāraṃ kāyavākcittaṃ trivajrābhedyasamāvaham” [GST:11.2.ef.] iti tatraiva vacanāt.

8）ata OṂkārasūcitāyā viśvasya cittamātratāyā darśanād **bhāvavarjitam**. tad eva cittamātraṃ viśvam abhāvaḥ, cittavyatiriktānāṃ bhāvānām asattā, asyāpi cittamātrasya viśvasya yā samatāpattir nirābhāsībhāvo HŪṂkārasūcitaḥ. taddarśanād **abhāvavarjitam**. evaṃ **bhāvābhāvavivarjitam.**

9）tat tarhi cittamātratāyāḥ samatāpatteś ca darśanaṃ kīdṛśam? atropadeśaḥ:praṇavam uccārayann iva vīrād ucchvāsena saha jñānaraśmirekhām udgacchantīṃ paśyet. tayā spharitvā viśvasya buddhamayīkaraṇaṃ bījākṣaram uccārayan svadevatākāreṇa tasya viśvasya vibhāvanaṃ cittamātratādarśanam. tato HŪṂkāraniḥśvāsena viśvasya vīre saṃhāraḥ samatāpattidarśanam. etad ubhayaṃ śanaiḥ punaḥ punas tāvat kuryād yāvat khedo na bhavatīty ayam atra tantre jāpaḥ.

10）この広観の過程は内容的に「生成のプロセス」（生起次第）に相当する．

11）この斂観の過程は内容的に「完成のプロセス」（究竟次第）に相当する．

12）Gu において R が示す MMT における念誦を『チャクラサンヴァラ現観註』（D:No.1465/P:No.2182）においてプラジュニャーラクシタ（＝Pra）が示すルーイーパ流の念誦（[桜井 1998] 参照）と比較すると，R 所説では広観と斂観の基盤が「勇者」であるのに対して，Pra 所説では「フーン字／ナーダ」とされている点が異なる．なお，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

広観を「「唯心性」の観察」，斂観を「「平等性に入ること」の観察」とするR所説の解釈はPra所説には確認されず，Guに特徴的である．

13）MMT第2章第16偈cd句に対するGuの註釈箇所に「**調息（prāṇāyāma）**とは吸気（ucchvāsa）と呼気（niśvāsa）の両者」という調息の定義が確認される（[MMT&Gu] p. 32, p. 138）．なお，MMT第2章第16偈cd句（[MMT&Gu] p. 32, p. 138）とMMT第3章第12偈ab句（[MMT&Gu] p. 40, p. 152）はオーン字を瞑想することの効力を説くGST第16章第39偈cd句（[Matsunaga] p. 89）と類似並行し，Rは後者に対する註釈箇所においてGSTの当該箇所を引用している（[MMT&Gu] p. 40, p. 153）．

14）『大幻と名づける難語釈』の梵蔵テキストは，その訳註研究とともに［大観2009a］［大観（1）］［大観（3）］として近年校訂出版された．

15）Gu全体を通じてRは密教的概念の解釈にも「唯心性」を強調する傾向にあり，その背景にある思想は無相唯識説に他ならない．特にMMT第1章第21偈に対する註釈箇所において，「**精液**」（**śukra**），あるいは「**甘露**」（**amṛta**）である「微細な**滴**」（sūkṣma**bindu**）を「心」（citta）と解釈して「唯心性」を説く点は興味深い（[MMT&Gu] p. 18, p. 109）．『真実摂経』において心を月輪と解釈する説と比較した場合，このようなGuの解釈は月輪の特性でもある「白く輝いているもの」という滴と心に共通の特性に着目した独特の解釈であり，無相唯識説における安慧の「水晶と茵の比喩」を髣髴とさせ（『講座・大乗仏教8唯識思想』（春秋社，1982年）所収の沖和史論文「無相唯識と有相唯識」p. 208注36参照），Rの「輝きのみ」（prakāśamātra）という考えに相通ずるものがある．なお，Rの主著『般若波羅蜜多論』（D:No.4079/P:No.5579）には「解脱身」（rnam par grol ba'i sku＝*vimuktikāya）の比喩として「清浄な水晶」が登場する（D:141b4/P:160a7）．この他，Guの唯識思想については［大観2009b］p. 1037（p. 106）註8を参照．

〈略号と参考文献〉

Cicuzza Cicuzza, Claudio（2001），*The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi*, Serie Orientale Roma 86, Roma. **大観（3）** 大観慈聖（2010）「『マハーマーヤー・タントラ』第3章第7偈～第3章第18偈に対するアランカーラシュリーの解釈」『高野山大学密教文化研究所紀要』23, pp. 104–63（pp. 105–146）．**大観2011**　大観慈聖（2011）「『マハーマーヤーと名づける陀羅尼』について」『高野山大学密教文化研究所紀要』24, pp. 148–125（pp. 69–92）．**桜井1998**　桜井宗信（1998）「Prajñārakṣitaの示す三種の念誦」『印度学佛教学研究』47-1, pp. 410–405（pp. 101–106）．**Sferra** Sferra, Francesco（2000），*The Ṣaḍaṅgayoga by Anuparakṣita with Raviśrījñāna's Guṇabharaṇīnāmaṣaḍaṅgayogaṭippaṇī*, Serie Orientale Roma 85, Roma. 大正：大正新脩大蔵経．

＊上記以外は［大観（3）］と［大観2011］の【略号と参考文献】に準じる．

〈キーワード〉『マハーマーヤー・タントラ』（＝MMT），『有功徳』（＝Gu），ラトナーカラシャーンティ（＝R），念誦，『秘密集会タントラ』（＝GST），唯識

（高野山大学密教文化研究所受託研究員）

NII-Electronic Library Service